

作家金満成について

(付：小説「少女の初恋」全訳)

米 井 由 美

はじめに

1920年代後半から1930年代にかけて人気を誇った作家の一人に金満成(1900-1971)がいる。当時の諸媒体では容易にその名を見つけることができるが、現代にいたっては彼の作品は全集のかたちで再出版されたわけでもなく、ごく稀に先行研究が残る程度である¹。まさに時代の流れに埋もれた作家といえる。

作家としては1925年に『小説月報』で発表した「児時回憶」を皮切りに、1927年にいたると長編小説『我的女朋友們』を出版し、この作品の印刷部数は6500部に達した²。ここで描かれたのは、愛のために生き、愛のために死ぬという、都会の女性たちの姿である。愛を渴望しつつも、それをどうやって追求めるのかがわからず、間違った方向でもがき、結局最後は傷つくだけだった。前世代のような恋愛観、結婚観を間接的に否定し、自由恋愛を謳歌しようともうまくいかないというのが当時の女性読者の共感を得たのではないだろうか。

果たして金満成とはいかなる作家だったのか。本稿ではこれまで顧みられなかった彼の生涯を追いつつ、今後の研究への道標として、金満成の作品目録を作成した。なお、本稿の目的は知られざる作家金満成の作品に触れることとし、彼の短編小説「少女的初恋」(以下「少女の初恋」と表記)の全訳を掲載した。「少女の初恋」は女性雑誌『玲瓏』(1931-1937)において九回に渡って連載された作品である。本来『玲瓏』では文学作品の紹介はさほど重視されておらず、限られたものであった一方、金満成の作品については他に「愛情中的政治手腕」³も掲載されている。「少女の初恋」を含めた作品の分析、とりわけ作品にみられる都会の男女の恋愛観については、今後別稿で論じたい。

一、金満成について

金満成（1900-1971）は四川省峨嵋県青龍場で生まれた。生家は貧しく、幼くして両親を亡くす。その後教会学校に入学するも、「聖經」を学ぶことに反抗し、除名処分を受けた。19年勤労学生として渡仏し、そこでフランス文学との邂逅を果たす。21年の秋、パリで起こった中国人留学生の愛国運動に参加したことにより逮捕され、陳毅ら仲間とともに母国へ送り返される。帰国後は北京にある中法大学で学び、中国文学やフランス文学の研究に励み、『晨報』副刊などで作品を発表した。フランス人作家フランスの作品の翻訳に取りかかり、のちにゾラやバルザック、モーパッサンらの作品も手掛けた。彼が作家であったことよりも、むしろフランス語翻訳家としての名声が現在でも根強いのはこのような背景が関係している。小説家としての処女作は、25年『小説月報』（第16巻第11号）に掲載された「児時回憶」にはじまり、いくつかの短編小説を発表した後、27年上海光華書局から出版された長編小説『我的女朋友們』へとつながっていく。『我的女朋友們』は再版を重ね、29年の第三版の印刷部数は6500部に達した。作品の多くは27年から34年のあいだに集中し、当時のメディアにおいても人気作家の一人としてたびたび紹介された。

小説家と翻訳家のほかに、編集者や記者としての顔も持っていた。26年『民衆日報』副刊の主編となり、29年になると南京に移り、呉竹似、陳銘徳、張友鸞らとともに『新民報』を立ち上げ、その副刊『葫蘆』の編集を担当した。32年四川へ戻り、『新蜀報』（重慶）の副刊を任せられ、記者として内地に入りこみ、四川軍閥混戦の罪状や戦区の人々の被害の惨状を暴く文章を多く残した。その後37年に愛国青年らと人力社を起し、『人力週刊』を出版し、重慶のいくつかの新聞社や雑誌社をまとめ、重慶市文化界救国連合会を組織してその主席兼宣伝班班長となった。

抗日戦争後、今度はベトナムに移り、サイゴンの華僑新聞『遠東日報』でフランス語の翻訳を担う。だがそこでフランスの植民地主義に反対する文章を翻訳し、掲載したことにより、国外追放を余儀なくされた。そのまま国外を放浪し、1949年になってようやく北京に戻った。中華全国総工会で仕事を再開し、のちに人民文学出版社でフランス文学作品の翻

訳、校正に従事した。文化大革命時の1971年、迫害を受けて亡くなった。

71年間の生涯において、作家としての執筆活動期間は10年ほどである。社会が成熟し、人々の生活にも一定の安定がもたらされた1930年代の時流に乗って金満成の作品は消費されたが、それは一時的な流行にすぎなかった上、作品自体も正当な評価を得ることができず、やがては風化されていった。彼が作家としての道を意図的に放棄したのかどうかは定かではないが、記者やフランス語翻訳家として筆を握り続けたのはまるで自分の作品の未来を見越していたかのようにも思える。

金満成という人物を知る上で興味深い逸話がある。1926年に発表された張競生ほか編『性史』にて、「初次的性交」という文章を江平の名で発表したことである⁴。張競生が新聞広告を用いて10数名から実際の性体験に関する文章を集めたことが『性史』の発端であり、そこで金満成は16歳の時の実体験を語った。彼が性の快楽を宣揚するさまは、自由恋愛を高らかに叫んだとしても、まだ性的な話題を公にすることがタブーであった時代への挑戦ともとれる。金満成の恋愛と性の解放という考えの根底は、意識的に礼教に反した結婚恋愛観を持つことであり、女性たちがその使命を負うことを望んでいたのである⁵。つまり彼は女性たちが正しい恋愛観や結婚観を知ろうとする機会を与えたかたではないだろうか。

金満成の恋愛観や結婚観は作品にどのように反映されていたのか。その手がかりとして、小説「少女の初恋」を紹介したい。この作品は女性雑誌『玲瓏』第41期から第49期（1931年12月23日-1932年5月4日）で連載されたものである。主人公は天津の中学校につとめる私（阿孟）という男性であり、過去の失恋体験を回想する場面がたびたび登場する。その一方、彼を取り巻く三人の女性たち—かつて愛した女性（阿姐）、その妹、彼女らの母親の姿がある。物語は阿孟の語りが中心であり、三人の女性たちの胸のうちは明確に表されていない。彼女たちの心情や阿孟に対する想いに注意しながら作品を読んでいきたい。

二. 小説「少女之初恋」のあらすじ

物語は主人公である阿孟が目覚めるところからはじまる。彼が今まさ

に寝そべっているベッドはかつて愛した阿姐が使用していたものである。なぜ阿孟が別れた恋人の家にいるのかといえば、阿姐から彼女の家族の世話を頼まれたからである。彼女自身は裕福な男性のもとに嫁ぎ、実家を離れている。彼女の実家には母親と妹、さらに彼女のまだ一歳にも満たない子供がいた。阿孟は彼女の家族の生活を助けようとするわけではなく、むしろ彼女らの世話になり、朝から晩まで別れた恋人を想うのであった。そんな彼を愛してしまうのが小妹妹（阿翠，小翠妹）—阿姐の妹だった。小妹妹は阿孟が今もなお姉に恋焦がれているのを知りつつ、彼の世話を一手に引き受け、やがてその健気さが彼の心変わり呼び起こした。阿孟はかつての失恋の痛手を忘れられない一方で、まだ深く愛し合っていない小妹妹との結婚を夢見はじめる。彼女の母親が姉と同じようにその妹も裕福な男性と結婚することを望んでいることも彼は理解していた。ジレンマに陥りながらも、「禁断のリンゴを食べようじゃないか」(「吃了這顆犯禁的蘋果罷」)と決心するのであった。だが、物語は思わぬ展開を迎える。小妹妹が突然彼に対し冷淡になったのである。話をしようにも彼女に避けられてしまい、そこへ勤務先の天津の学校から帰任を督促する手紙が送られてきたことにより、阿孟は傷心のままその場を離れるほかなかった。以前恋人にしたように、小妹妹にも思いの丈をつづった手紙を送るが、返事はなかったので、彼は失恋を宣言する。しばらくすると小妹妹から弁解を記した手紙が届くが彼にすればもう無用のものである。失恋の痛手と仕事の解雇を乗り越え、その五年後、阿孟は上海へ辿りついた。そこで待っていたのは、すでに二人の子供を持つ小妹妹との偶然の再会だった。小妹妹の招待を受け、阿孟は翌日彼女のもとを訪ねる支度をするのであった。

三. 小説「少女の初恋」全訳⁶

(一)

まぶたを開けた時、太陽は紗張りの窓を開いていた。この窓の上にある太陽は、「もう11時だぞ。まだ起きないつもりか？」と明らかに言っているようだった。しかし、起き上がることはできなかった。ぼかぼか

した、こぎれいな部屋に一人でいる。そこには柔らかなベッドがある。このベッドこそ私の愛した人が使っていたものだ。ここで目を覚ますと、昔のことがひとつひとつ思い浮かんでくる。なんと楽しいことか。

これまでの人生は、滑稽なことが満ちていた。美しい女性を愛し、彼女を数年追いかけたが、結局彼女は他の男と結婚した。彼女の手を握ることも、どこかで二人きりで過ごすこともできやしなかった。しかし、今も彼女のことを「恋人」と呼んでいる。永遠の恋人なのだ。ああ、なんて滑稽なんだ。数日前彼女が実家に戻り、手紙の中で一番特別なプレゼントを私に送りたいと言っていた。いいだろう。彼女の「特別」なプレゼントを受け取るため、私は400里を超えて彼女の母親の家へと向かった。

「特別なプレゼントって？」

「ちょっと待ってて」

しばらくすると母親が一歳ぐらいの子供を抱いてやって来た。彼女はその子供を指さして言った。

「この子があなたへの特別なプレゼントよ！」

彼女の子供、彼女と彼女の夫の間に生まれた子供を私へのプレゼントにするだなんて。特別といえばたしかに特別だが、冗談がひどすぎるし、残酷すぎる。滑稽も滑稽だ。あの場面を思い出すと吹き出しそうになる。すべては過ぎてしまった、頭の中で過ぎ去るのはもっと早い。また別の場面、今度はいくらか悲劇の趣がある。そう昨日のことだ。彼女はハルピンから戻って来た。私は道化役になって、彼女を駅まで送った。列車の発車まであと3、4分となった時、彼女は自ら窓の外に手を伸ばし、私の手を握りながら言った。

「阿孟、ここで別れたら、今度はいつ会えるのかわからないわね」

彼女は泣いた。すこし泣いただけで感情をこらえていた。これまで彼女のはしゃぐ姿や活発さだけを見てきた私は、この時彼女の憂悶の美を新たに見た。見れば見るほど心は動かされるものの、彼女は私を見ると言葉が出てこなくなった。次にいつ会えるかわからない彼女は、もうすぐ私の元から離れ、遠くへ行ってしまう。ああ、神よ。

「母さんと妹のことはあなたに任せたわ」

彼女は私の手を握ったままだった。彼女は私に対して悪い感情はないというのに、私はこの二日間何をしていたというんだ？ 多くのチャンスを失った…そして列車は出発した。

(二)

また違う一幕だ。あの場面を思い出していると、実に辛酸を感じずにはいられない。ベッドの上で寝がえりを打って、この場面に幕を下ろすことにした。そうでなければ、私は泣いてしまうだろう。太陽はさらに一尺高く上がり、時計は11時を回った。

「入ってもいい？」

「小妹妹か？」

「私よ」

「どうぞ」

「まあ、まだベッドの上にいるの！ あなたって人は」

「ベッドの下でなんて眠れないだろ？」

「ベッドの下で眠らないこともできるでしょう！」

私は目を閉じて眠たげなふりをしているが、実際の朝寝坊とは異なり、彼女が入ってくるのをずっと注意して見ていたのだ。彼女の手にはたくさんのコウシンバラがあり、話をしながら化粧台のところへ行って、花瓶の中の古い花を取り、新しいものに変えた。太陽の光は窓を照らし、花瓶を照らし、枝を照らす。少女のウエーブがかかった髪型は実に美しい。まさに芸術写真を撮る時にふさわしい材料のようだ。この手にカメラがあれば、得難い名作になるのだろう。でもそれがない。今はただ描くことのできない美の印象を心に留めることしかできない。

「見て。姉さんがいなくなって一日しか経ってないのに、花も人間と同じでやつれるものなのね」

返答するタイミングがなかった。彼女の言葉に応答する気がなかったとも言える。そっと彼女のほうをながめた時、自然に目を開いた。

「まだ姉さんの夢を見てるの？ もうあなたの恋人じゃないわ」

「今まで一度も僕のものになったことはないさ」

「かわいそうな話ね」

「無駄話はよそう。君の母さんは？」

「あなたの好きなものを買いに出かけたわよ」

「君は何でも母さん頼りだな」

「使用人が買ってきたものなんて、あなたが食べないからでしょ」

「君の母さんって本当に優しい人だね」

「優しいんじゃないくて、あなたを愛してるの。身寄りのないかわいそうな子供だからですって。気づかなかった？ 母さんはあなたを息子にしたいのよ」

「彼女の息子になる資格なんてないさ。ここに住んでから、いつも気を使ってもらって、本当に申し訳ないよ。引っ越したいぐらいだ」

(三)

「何が申し訳ないのかしら。全部姉さんがいなくなったのが原因なのよ。この前、引越しの話なんてしなかったでしょ？ 昨日姉さんが帰って、今日は…」

「阿翠、ちょっと降りてきて。この白菜は孟さんに作るんでしょ！」

それは母親がドアの向こうで叫ぶ声だった。私はベッドの上でもその声がよく聞こえたが、小妹妹は「母さん、何か用？」と言いながら出て行った。

もう起きねばならない。あれ、不思議な感じがした。彼女が入ってきて三十分の時間も経ってないのに、化粧台の上でぐちゃぐちゃにした手紙が整えられていたからだ。めちゃくちゃに置いてあった服も畳まれていたし、フェイスタオル、歯ブラシ、歯磨き粉にいたっては、すべて私を取りやすいように完璧に用意されていた。私はなんて幸せなんだ。私のために部屋を整理してくれるという活発で無邪気な少女がいるなんて、実に得難いことである。

顔を洗う水を汲んでもらって洗顔した後、すぐに昼食を食べた。料理は決して多くないが、それぞれ小妹妹が作ってくれたものだった。食事

中、彼女は矢継ぎにこうたずねてきた。

「ねえ、私が作った白菜どう？」

「まあまあじゃないか」

「じゃあもっと食べて。豆腐は？」

彼女は私がまずいと言うのをとても恐れているようだった。そこで今の話にわざと事実を加えた。

「豆腐？ まだまだだな」

と言いながら、私ははははと笑った。

「それなら、私が作ったものなんて食べなくていいわ」

「いや、絶対食べるさ」

白菜や豆腐を多めに食べたので、彼女はうれしそうだった。昼食を食べ終えた午後、完全に小妹妹のお遊びタイムとなった。彼女は落花生をいくつか渡してきたと思うと次は数枚のビスケットをくれた。そして今度は阿姐の写真が曲がっているのを、それを直すと言いつつ出た。つまり、彼女は私のあらゆる行動を観察し、あら探しをするためにこの部屋へ入ってきたようだ。私には他人に調べられるような秘密などない。

(四)

あるとすれば、手紙を書くことだ。別れてしまった愛しい恋人にあてる長く甘い手紙を書きたい。小妹妹が部屋に入ってこないだろうと確信してから、紙を広げ、ペンを振るって書いた。

愛しい君へ 僕がどうして君に手紙を描くのかわかるかい？……

「何を書こうかご自由に。何だって書けばいいじゃない！」

やっぱり彼女だ。小妹妹がやって来た。いつのまにか、この部屋に忍び込み、こっそりと後ろに立っていた。私の手紙を読むと、こうやって声を張り上げたのだ。振り返って彼女を見ると、彼女は一歳にも満たないであろう赤ん坊を抱いていた。

「ラブレターの邪魔はしないわ、さようなら」

「いいよ。僕は子供が大好きなんだ。誰の子供だい？ ちょっと抱いてみようか」

私は手紙を紙の山に押し込み、赤ん坊を抱いた。

「もしあなたに子供がいても愛せる？」

「嫌いかもね。でも彼女の子供なら大好きさ」

「もういい。やっぱり帰るわ」

彼女は子供を抱いて去っていった。

そんなことがあったので、手紙を書く気がしなくなった。あの少女にはどんなたくらみがあるのだろうか。彼女がまたここに入ってきたら、今度こそはそれを聞いてはっきりさせたい。しかし、おかしなことに彼女は二度と入ってこなかった。夕食まで待ってみたが、彼女が入ってくることはなかった。

翌日、ほとんど昨日と同じように過ごした。朝、彼女は花瓶の花を取り替えてやって来て、私が着る服を整えた。水を汲んでもらって洗顔をし、私に食事を作ってくれた。午後、色々な話をして笑い合った。つまり、15歳の少女が心を込めてもてなしてくれるという温かな生活を、この一週間のうちに享受しつくしてしまったとも言える。だが、200、300もの生徒が学校で私の休暇明けを待っていることを考えると、結局はこの温かく甘い生活を捨て、自分の義務を果たさねばならないのだ。

しかし、ついにその日が来た。どういうわけかわからないが、小妹妹のあどけなさがもう本物のあどけなさではなくなり、私に対する行動すべてがまったく魅力的なものとなって、私を攻める愛となっていた。もし私の感覚が間違っていなければ、この純真な気持ちにどう向き合っていけばいいのだろうか。同時に、私の感覚が間違っていたとすれば、あどけない少女を愛の迷路に陥れたということが、どんなに罪なことだろう。

二度恋の煩惱に踏み入ることも極端に恐れるようになった。この煩惱を解くため、まず少女の心が一体どのようなものかをはっきりさせねばならない。私は画家ではないし、カメラマンでもないとしたら、解剖学者なのだ。5000倍の顕微鏡を用いて、彼女の心の奥深くをのぞき見るつ

もりだ。

朝、彼女がドアをノックすることも、部屋に入ってくることも、耳をすませるふりをした。実際はというと、布団の片隅からそっと彼女を盗み見ていたのだが。

(五)

ついに見つけた。彼女の顔には純粋な初恋の表情が宿っている。この魅力的な表情は、数年前に彼女の姉の顔に宿っていたものとまったく同じだったことに気づいた。ほーっと彼女を見た。ああ、彼女はまさに5年前の阿姐じゃないか！ 同様の美しさ、同様の愛らしさ、そして同様の、感動的で描写しがたい表情。彼女は恋をしている。恋し始めた。15歳になったばかりだということに。

疑うことは愛なのだある人は言った。それはおそらく正しいことなのだろう。私は十分に彼女を疑っている。そこで午後は友人に会いに出かけるというふりをして、外出前にこんな詩を残しておいた。

僕がこんな人間だとしても
彼女は人知れず僕を愛すのだろう。
この愛を受け止めるべきか。それとも逃れるべきか。

この詩を紙の山に押し込み、私は部屋を出た。戻ってくると、詩の後に続きが書かれていた。

あなたを人知れず愛する人がいたとしても
あなたはまだ知らないのでしょうか。それが誰なのか。
ああ、人知れずあなたを愛するなんて、
その子はお気の毒ね！

生活がだんだん鮮やかになれば、気持ちはますます高まっていく。愛の宣言まであと一歩か。でもそれは簡単なことだ。彼女がこの部屋に入っ

てきた時、彼女の手を握り、彼女を抱きしめ、キスをし、「僕のこと好き？僕は君を愛してる！」と言えばいいのである。こうして愛の宣言が成立するのだ。そして…

ベッドで横になっていると、さまざまな幸福の夢を見た。数年来追いかけても得られなかった愛が、もうすぐ彼女とともに手に入りそうだ。彼女の手を引き、公園に行く。誰もが私を羨むだろう。だって、こんな美しい女性を連れているのだから。この女性は、恋人であり、愛する妻であり、人生の幸福を託す場所でもある。すべてが終わったとしても私は満足だ。他に何を求めろと言うのか？

まさに想いを馳せている頃、彼女が来た。夜の10時半という時間に来て来たのははじめてだ。横になっていた私は、にわかな邪念に襲われた。だが、この邪念はすぐに消えた。彼女はもう私の女じゃないか。処女の美しさは最後まで残しておくべきである。彼女はまだ子供、何も知らない子供なのだから。

「あなたって本当によく眠るのね！夜の9時に寝たのに、昼の12時になってようやく起きるなんて。まるまる15時間も寝ちゃって」

「文句あるか？」

「学校に勤めていた時、朝どうやって起きて授業をしていたの？」

「そう言われてみればおかしいな。授業があれば早く起きてたからなあ」

「まったく信じられないわ」

「証拠はあるさ」

「じゃあ、私が試してみるわ。」

(六)

明日7時に授業を始めましょう。私がドイツ語を学ぶ生徒役になって、中央公園を学校としてね。あなたが起きてこられるか楽しみだわ。じゃあ、明日ね。いいわよね？」

「もし遅れたら？」

「何か罰をして」

「よし。じゃあ、明日はドイツ語を勉強しようじゃないか！」

彼女は魂のようにひらひらと漂いながら、突然去っていった。もし彼女を愛すれば、きっと自由を失う。急にそう感じた。彼女には彼女なりの幸せがあって、これは安易に侵すことができないものだ。彼女の家族は、母親、姉、そして彼女である。彼女らが望むことは、資産階級の生活することだ。住まいは洒落た装飾品をしつらえ、花瓶の花は一日に一回交換し、食べるものや着るものも粗末なものであってはならない。母親は娘たちが一生幸せでいられるようにと話す。母親が考える幸せとは裕福なことである。そのために長女を月収600円の京綏路管区長に嫁がせ、次女は管区長よりもさらに大家なお坊ちゃんに嫁がせるつもりだ。

長女は母親の影響を受けた。だから私を愛さず、他の男と結婚したのだろう。私を愛する小妹妹はどうか？ 彼女が母親と姉と一緒にだとは思えない。ただ、彼女の生活ぶりはあまり庶民らしさが見えない。彼女が私を愛していないのだとすれば、私は命がけで追うだろう。しかし、彼女が私を愛すると高らかに宣言しかけた時、数多の困難な問題が思い浮かんだ。この困難な問題は決して理性に属するものではなく、感情に属するものなのだ。私はどんな人間なのか？ どんな奴で、この世界で求める幸せとはどんなものか？ ああ、40円の月収、一ヶ月7元の部屋で、布団は三ヶ月も洗っていない。部屋は古新聞でいっぱいだ。もし小翠妹がこんな実際の生活を見たら、どんな思いを抱くだろうか？ 愛し合って結婚した後、どんなかたちで彼女の生活に満足感を与えられるのだろうか？ すべては幻想だ。美しい人生なんていうものはある日突然崩れ去るものだ。その時、世界の冷酷さは、私を愛していない女性を追い求めることと比べるとさらにつらいことだろう。彼女は毎日私を追い回し、明日は公園で会うという約束までしている。しかし、彼女はやがて姉と同じく、私のことを身寄りも家もないという貧しいごろつきだと認識するのではないか。私はこんな破滅的な夢を見ている。今の小妹妹は、取り繕ったそれなりの服を着て、面白い話ができ、趣のある詩が書けるといふ面では私を見ていない。だが、実際の生活ぶりはどうか。一ヶ月に貯金を残すこともできず、足りない分は友人らから借りている。もし小妹妹がこの状況を理解したとしたらどうなるだろうか？ きっと失望

感が生まれるはずだ。

(七)

どうすればいいのか。明日、公園ではそれなりに愛の応酬が待っているだろう。これらの話をすべて彼女に伝えるべきか。すぐさまこの夢物語、または喜劇ともいうものを破壊しなければならないのか？ そんなの早すぎる。もったいない。しかし、私は行かないわけにはいかないのだ。

重苦しい二日目を迎えた。昨夜はまったく眠れなかった。東の空にひとすじの白線が見え、同時に紗張りの窓がその暗さに淡い青みを帯びてくるのも見えた。私は翠妹を脅かすために早く起きた。コップ一杯の冷たい水で口をゆすぎ、そのまま部屋を後にし、中央公園へと向かった。その時によく耳をすませてみたが、小妹妹の部屋には何の物音もしなかった。

空はまだ魚の腹のように白く、通行人がまばらにいただけだった。こんな静か光景は中学時代に見た以来で、それからもう十年も経っている。この十年来、これほど早く起きた日はないだろう。とりわけ強く興味を引かれるのは、公園に着いた時に、空が突然純粋な青色に変化し、太陽が昇るかどうかという一瞬である。感動的な金紅色と花模様をおびた雲は、私の周りにあるものだ。古びた松の木や柏の木、新鮮な空気、小鳥の鳴き声、芳しい花の香り、絵画のような水辺、言うならば詩意にみちた環境で、池のほとりにそって歩いていくと、岩かげに15歳の少女がいた。カジュアルな服に身を包み、顔はほお紅を塗っていなくても艶があった。

彼女は微笑みながらこう言った。

「ほら、やっぱり遅れたわね！」

私は話ができなくなるくらいにガンと押し沈められた。彼女が遅れたことは明らかだが、私はわざと負けたことで、彼女を勝者に仕立てたのだった。しかし、互いの心のなかでは本当の勝者と敗者がどちらなのかわかっていた。これは確かにささいな恋愛物語のなかでもっとも面白い駆け引きである。

驚いたのは彼女の手もとから案の定ドイツ語のテキストが出てきたことだ。彼女は話を続けた。

「ドイツ語を教えて」

「どこでやろうか？」

「あそこよ！」

彼女は背の低い柏の木を指差したので、遊覧客がめったに来ないであろう木かげに二人そろって座った。テキストを開いた時、妙な感じがした。これは三年前の突然なくなった私の英独併記のテキストじゃないか。どうして彼女が持っているのだ？

(八)

彼女にそう問う暇もなく、「アー、ベー、ツェー、デー、……」とアルファベットの読み方を教えた。彼女のふっくらした、白く滑らかな指先はアルファベットの上であり、その口は私が教えたとおりに読んでいる。ああ、なんて肉感的で色っぽいのだろう。私はもう感情を抑えることができず、彼女を抱きしめ、理性を失ったかのように口づけを交わした。彼女は決して拒まなかったが、受け入れたわけでもなかった。恥じらいの美ともいうのだろう。その後互いに向かい合うのをためらっていると、しばらく時間がたってしまった。結局私のほうから口を開いた。

「ドイツ語を教える気がなくなった。話がある」

「言って」

「君はどうして僕を見ようとしないんだ？」

彼女は恥ずかしげな表情でこちらを見た。私はその隙にまた彼女と短い口づけをした。

なんだかおかしい。もう恥ずかしさなどなかった。

「小翠妹、君は僕を愛しているのか？」

「自分で考えてみて」

「君はきっと僕を愛しているね。うれしいよ。でも…」

「えっ？」

「でも、残念だけど君の愛は受け取れない」と本来は言うつもりでいた。

しかし、こんな甘い夢を今打ち壊すことはあまりにもったいないので、言葉を変えた。

「でも不思議だな。15になったばかりなのに、君は愛を知っていると言うのかい？」

「ははは。もう三年前に知ってたわ」

「恋愛で何が起こるのか、わかってるの？」

「少しね」

「つらいこともあるけど、大丈夫？」

「それも少しならね」

「なんでこんなに大胆に恋愛に踏み込もうとするんだい？」

「愛って、他のことよりも大事だと思うから」

「君は僕を愛しているね」

「そうよ」

「あなたが私を深く愛しているから」

「いつ僕が君を愛していると言ったんだ？」

「三年前にあなたがそう示したわ」

「三年前？ 僕が君の姉さんにアプローチしてた時じゃないか！」

「はあ。あなたは別に姉さんを愛してなかったわ。愛してたのはこの私よ。それにあなたの日記があるでしょ」

「何の日記だ？」

「話がちょっと長くなるけど。髪がボサボサのまま撮った写真があったの。 MARIA様のまねをしてたの。それがある日突然なくなっちゃって。あちこち探したんだけど、あなたが持ってたのね。日記にもあの写真をいつ盗んだのかが書いてあったし」

(九)

「ははは。あの写真はよく撮れていたから気に入ったんだよ。 MARIA様によく似ていたからね。だから持っていったんだ。これが君を愛しているっていう素振りだったなんて思わなかったな」

「愛してないのに写真を持っていくなんて変でしょ？ だからあの時私

もあなたを愛してると伝えたかったから、このテキストを盗んだの！」

「じゃあ、泥棒とスリが恋愛してたって言うのか？」

彼女は笑った。その後は他愛のない話を続けた。だが、私は彼女の心を見抜き、彼女を愛するのか、愛さないのかをはっきりさせるため、ふたたび恋愛の話をした。本音を話せば、彼女が私を愛する最大の理由は私があまりに可哀そうだからだと言う。彼女は姉がなぜ私を愛さなかったのかと恨み、恋人を得られなかったという私の精神的な損失すべてを姉にかわって償いたかったのだ。私を愛する別の理由は、私が彼女の学業を手助けすることができるし、私の話は彼女を愉快にさせるからだと言った。

どんなふうと言ったとしても、彼女が私を愛する気持ちに偽りと不適切さがあるようには思えなかった。彼女があまりに私を愛しすぎて、私の生活がめちゃくちゃになってしまうことを恐れる一方で、愛という誇りを感じるために、彼女が本当に私を愛していることを強く望んでいた。太陽が出てきたばかりの時からもう少し高く上がるまで、ずっと話し続けた。私は気の向くままに愛情すべての試金石を彼女に投じてみたい。我々の年齢は不釣り合いであり、私との生活には困難があるし、彼女の母親に我々の交際の話全部話したとしても反対されるはずである。話は核心まで進んだ。結婚後の女性の出産や家庭の負担などの重い話まで伝えた。すべて話しても彼女を困らせることはできなかった。彼女は犠牲を払っても私を愛すると望んでいたからだ。

もういい。彼女を愛そう。彼女を自由にしよう。禁断のリングを食べようじゃないか。前途がいばらの道で、泥にまみれた道であっても、策を練って通り過ぎよう。我々は10時すぎまで話した。木かげから池のほとりやあずまやのほうを眺めると、すでにたくさんの遊覧客がいた。私たちはそこから出た。本物の若夫婦のように他人に指差されるのを恐れず、手を引き、公園を横切って帰っていった。彼女を愛そう、そしてどのように生きていくのかを夜通し考えた。ある道を思いついた。この道を歩むのは結構大変なことだが、やっていける可能性もある。楽観的に眺めようじゃないか。

三日目。事情がかわってしまい、まったく訳がわからなかった。昨日はこんなにも熱烈に私を愛していると示した小妹妹が、今日は私に対して異様に冷たくなった。同じように母親も冷たくなった気がした。この冷たさを具体的に言い表せないが、とにかく感覚的に感じたのだ。私はチャンスを見つけて小妹妹と話がしたかったが、彼女はその度にわざと避けているようだった。同時に学校が何通かの手紙を私に送って帰任を催促してきたので、翌日天津へ帰るほかなかった。彼女らも私を留めようとせず、翌日本当に帰る時になっても互いにあっさりとは別れただけだった。

急に冷淡になってしまった恋人の気持ちを探ることはできない。私が天津に帰ることはとてもつらかった。生活のこともあったので、最初から彼女の愛を受け入れたくなかった。彼女が私に冷たくなったことの背景には何かある。だが、彼女の愛を受け入れてしまった以上、苦しみがやってくるのである。苦しみの中、この上なく長く、この上なく情熱的な手紙を彼女に書いた。彼女がすぐに返事をくれるよう望んでいた。だが、一日が過ぎ、二日、三日、四日、五日、六日、七日、八日たっても返事はなかった。二通目を送ってもやはり返信はなかった。私は正式に失恋したのである。私も普通の失恋した者と同じように、人を殺したくなったり、自殺したくもなったり、よからぬことをしてやりたいと思った。結局苦しみはまるまる一か月続いた。哀れなことに彼女の手紙は突然来た。まったく言い訳がうまいものだ。手紙によれば、公園に行った日以来、母親は彼女が私を愛しているのかと疑いはじめ、私を愛してはいけないと暗示するようになった。だから彼女は私に対して冷淡にするしかなかったと言う。私の手紙に返事がなかったことについては、彼女は翌日病気にかかり、母親が枕もとで彼女の看病をし、終日離れなかったので、手紙を書くことができなかったようだ。相変わらず私を愛している。二週間以内に会いに来てほしいと書かれていた…

もう終わりだ。彼女はまるっきり冗談を言っている。失恋の痛みがまたやって来た。交通費なんてない。二週間のうちに会いに行くなんてできない。君という女性を愛する資格は私にはないし、愛することはでき

ないのだ。決めた。もう君には手紙を書かない。つらかったが、もう心はずいぶん落ち着いていた。

その後も彼女は何度か手紙を送ってきた。どの手紙も彼女はとても寂しく、以前休みを取って姉さんに会いに来たように休みを取って会いに来てほしいと書いてあった。封筒や便せん、写真立てのようなものを買って送ってきてほしいともあった。結局彼女の手紙というのは、ラブレターの形式どおりものである。幾度となく決意を変え、彼女とまた手紙のやり取りをし、もう一度彼女と愛の道を歩もうとも考えた。しかし、彼女がかつて私に味わせた失恋の恨みを忘れることができず、さらに私の生活もますます困窮し、ついに彼女の愛を享受する資格がなくなってしまった。ほどなく学校は私を解雇し、40元の収入もなくなった。そこで甘美な夢と悪夢すべてを捨て、南方へ流浪するしかなかった。

5年の歳月はあつという間に過ぎた。ある日、突然上海のとある公園で見たのは彼女ではなかるうか？ 私の小翠妹ではないか。彼女は結婚し、すでに二人の子供がいた。この5年間のことをざっと教えてくれた。母親が死んだ後、経済的困難のために、それなりに金を持っていた夫に嫁いだ。夫のことは愛している。しかし、心の空虚さを強く感じることも言った。彼女は当初私を恨んだが、後々私の考えを理解するようになった。また彼女は住所を私に告げ、ぜひ家に遊びに来てほしいと言った。そして私がこの数年で出版した本をすべて読んだらしい。

「思いもしなかったでしょう。あなたの作品を手にするのがどんなにうれしかったかなんて！」

彼女は私を懐かしむ気持ちを示した。その後、公園のなかを散歩して別れた。

この物語を書き終えた今、私はやはり孤独な人間である。明日、彼女の家を訪ねようと思っている。心は弾んでいる。この訪問によってどんな面白いことや重苦しいことが起こるのかわからないからだ。

結び—今後に向けて

木村涼子『〈主婦〉の誕生—婦人雑誌と女性たちの近代』(吉川弘文館、

2010年初版、2011年第三版)の第四章では、1920年代から1930年代の婦人雑誌における通俗小説の可能性が論じられている。通俗小説の研究は軽視されており、前田愛「大正後期通俗小説の展開—婦人雑誌の読者層」(『文学』、1968年：『近代読者の成立』、有精堂、1973年)において本格的に論じられるまでは通俗小説を扱う研究はほとんど存在せず、菊池寛(1888-1948)や吉屋信子(1896-1973)が時折考察されてきたのみであると木村は断言する。多くの作品や読者を擁した女性向け通俗小説の魅力を、前述の菊池、吉屋と並んで加藤武雄(1888-1956)という三人の作家を通じて再現している。加藤は当時通俗小説を量産した作家であるが、これまで忘れられていたといっても過言ではない。著書である木村は国会図書館などでの調査、さらには直接古本市場に出向き、加藤の作品および関連資料を取集し、目下彼の作品目録を追加作成中とのことである。

本稿を書くきっかけはまさに木村の研究の示唆が大きい。中国の女性雑誌と新文学のかかわりについてはあまり論じられていない⁷。そのため、中国の女性雑誌において新文学がどれほど普及していたのかも未知数である。筆者はそれを解明する糸口として金満成の存在に注目し、彼と女性雑誌『玲瓏』のかかわりを今後さらに追及していきたい。金満成は本稿で記述したとおり、作家としての執筆活動は短かったが、作品を量産している。しかし、加藤武雄と同様、先行研究も乏しい上、すべての作品を網羅した作品目録は存在しない。当時人気を誇っていたという事実は、読者が彼の作品に魅力を感じていたことを物語っているの言うまでもない。金満成という作家の再発掘をすべく、手探りながら彼の作品や関連資料を集め、全作品を網羅した作品目録を今後作成していきたい。彼はフランス語翻訳家としての顔も持っていたので、本稿では言及できなかった翻訳作品についてもいずれ調査しなければならない。

最後に小説「少女の初恋」が掲載された女性雑誌『玲瓏』について言及しておく⁸。『玲瓏』は1931年3月に上海・三和公司出版部から出版された。もっとも顕著な特徴としては、写真の多さがあげられる。表紙と背表紙は上海を中心とした都市に住む令嬢や映画女優が飾り、雑誌の中

にも写真が多く掲載されている。グラフ雑誌の性格も併せ持った様子は現代のファッション雑誌の祖ともいえる。なぜ写真が多いかといえば、雑誌の発行人をつとめた林澤蒼（1903-1961）が中国撮影学会を立ち上げた人物であることが由来する。文字を極力排除し、写真やイラストを用いてファッションや流行を表現することで、幅広い読者を獲得することに成功したのである。このような特色を持った雑誌のため、文学作品はあまり掲載されていなかった。それにもかかわらず、金満成は二作品の連載を担っていたのである。このことから彼の作品は女性読者に受けていたことが推測できるのではないだろうか。

参考文献

[日本語]

- 秋山洋子ほか編訳『中国の女性学—平等幻想に挑む』、勁草書房、1998年
 坂元ひろ子著『中国民族主義の神話—人種・身体・ジェンダー』、岩波書店、2004年
 南雲智編著『中国現代女性作家群像—人間であることを求めて』、論創社、2008年

[中国語]

- 孟悦、戴錦華著『浮出歴史地表—現代婦女文学研究』、中国当代学术思想文庫、中国人民大学出版社、2004年

金満成主要作品目録⁹

【1】初出誌（小説、散文等）

タイトル	初出誌（巻・期）	発表年月日
「児時回憶」	『小説月報』（第16巻第11号）	1925年11月10日
「国慶日」	『文学週報』（第207期）	1926年1月10日
「甚麼叫做芸術」	『文学週報』（第238期、第239期で連載）	1926年8月15日、8月29日

「致我的女朋友們—代序」	『幻洲』(第1卷第12期)	1927年9月
「含酸素的愛」	『現代小說』(第1卷第6期)	1928年8月
「鬼的談話」	民衆日報民間叢書, 民衆日刊民間叢書出版部	1928年10月
「和尚与尼姑」	『現代小說』(第2卷第3期)	1929年
「参考書」	『現代小說』(第3卷第1期)	1929年10月
「我的丈夫」	新宇宙叢書, 1929年10月版, 上海新宇宙書店	1929年10月
「曾仲鳴訳の『法郎士』」	『文学週報』(第378期)	1929年12月8日
「友人之妻」	『小説月報』(第21卷第1号)	1930年1月10日
「情人制的思想」	新宇宙叢書, 1930年2月版, 上海新宇宙書店	1930年2月
「金の価格」	『文芸月刊』(第1卷第1号, 第2号で連載)	1930年8月15日, 9月15日
「胎」	『文芸月刊』(第1卷第3号)	1930年10月
「愛」	『文芸月刊』(第1卷第5号—第2卷第1号, 第2号, 第3号まで連載)	1930年12月15日—1931年1月30日, 2月28日, 3月30日
「朱溪訳の法郎士」	『新現代』(第1卷第2期)	1931年9月1日
「少女之初恋」	『玲瓏』(第41期—第49期まで連載)	1931年12月23日—1932年5月4日
「愛情中的政治手腕」	『玲瓏』(第62期, 第63期で連載)	1932年8月10日, 8月17日
「社会的層次」	『矛盾』(第3卷第2期)	1934年4月15日
「瘋狂以後」	『中国文学』(第2卷第2期)	1934年8月
「動搖の心」(「内在の新解剖」)	千秋九分叢書, 上海千秋出版社	1934年
「他的夢」	『文芸月刊』(戦時特刊第2卷第9・10期)	1939年1月1日
「中日關係の一角」	『中国抗日戦争時期大後方文学書系』(艾蕪主編, 第3編小説第3集, 重慶出版社)	1989年版

【2】単行本

タイトル	出版元	発表年
『我的女朋友們』	上海光華書局	1927年8月初版, 28年1月再版, 29年第三版
『愛与血』	上海現代書局	1928年4月初版, 同10月再版, 29年7月第三版
『林娟娟』	上海現代書局	1928年10月初版, 29年5月再版
『花柳病春』	上海現代書局	1929年2月初版, 37年再版
『黄絹幼婦』	上海遠東圖書公司	1929年3月
『女孩兒們』	上海樂華圖書公司	1929年10月
『友人之妻』	上海光華書局→上海大光書局(36年)	1931年2月初版, 1933年第三版/1936年7月
『愛欲』	上海光華書局→上海大光書局(36年)	1931年10月初版/1936年3月

- ¹ 金満成に関する先行研究では、まず李躍力「金満成一不該被遮蔽的小説家」(『新文学史料』, 2007年4期, 人民文学出版社)が挙げられる。本稿における金のプロフィールや作品に関する情報は同論文のほか、『中国文学家辞典』(現代第二分冊, 四川人民出版社, 1982)による。李(2007)では金満成の先行研究を二つほど紹介している。李華飛「著名文学翻訳家金満成」(『文史雑誌』, 1990年第1期), 魏奕雄「著名翻訳家金満成」(『中共樂山市委党校学报』, 2006年第3期)。(いずれも筆者未読)また金満成夫人陳鳳兮が残した「陳毅軼事」(『紅岩春秋』, 1997年第5期)でも彼に関することが紹介されているという。
- ² 前掲「金満成一不該被遮蔽的小説家」117頁, 127頁参照。
- ³ 『玲瓏』第62期567頁-568頁, 第63期615頁(1932年8月10日-1932年8月17日)。デート当日, 女性は何かと支度に時間がかかるので, 男性側は気分を害さずに恋人に対応するように示されている。内容としては散文に近い。
- ⁴ 前掲「金満成一不該被遮蔽的小説家」129頁参照。
- ⁵ 前掲「金満成一不該被遮蔽的小説家」118-120頁参照。
- ⁶ 翻訳にあたっては, その便宜上『玲瓏』での連載順に合わせて(一), (二),

(三) のように通し番号をつけた。たとえば(一)は連載の第一回(『玲瓏』第41期掲載分)を表す。ただし、『玲瓏』誌面の紙幅の都合により、会話や段落の途中にもかかわらず、その続きを次期に持ちこしている箇所(五)の最後と(六)の最初を指す)もあるので、原文と参照する場合はその点に注意する必要がある。

- ⁷ たとえば、城山拓也「郭建英と流行のリアリティ—1934年の『婦人画報』を中心に」(『饕餮』第19号、2011)では、『玲瓏』と同時期に出版されていた『婦人画報』には「掌篇小説欄」があり、ここでは「現代派」である劉呐鷗、穆時英、施蛰存、黒嬰などの作家の作品が発表されていたと述べられている。
- ⁸ 近年『玲瓏』の先行研究が中国、台湾、アメリカなどで散見されるが、その中でも代表的なものは孔令芝『従『玲瓏』雑誌看—一九三〇年代上海現代女性形象的塑造』(台湾：稻郷出版社、2011)である。『玲瓏』を通じて1930年代の都会の女性像を構築しつつ、版元の華商三和公司や発行人の林澤蒼に関する詳細な調査もなされている。筆者は拙論「『玲瓏』雑誌研究—摩登女性が拓いたユートピア」(2009年度修士論文、首都大学東京)の執筆の際、孔氏本人から多くの示唆を得た。
- ⁹ 作品目録作成にあたっては、前掲「金満成一不該被遮蔽的小説家」127-128頁にもとづく。『玲瓏』に掲載された二作品を含めた数作は筆者の調査のもとで付け加えた。初出誌と単行本のいずれも出版年月順に並べた。なお金満成の翻訳作品については本稿では対象外とした。